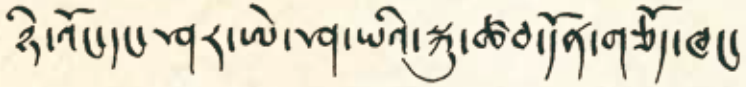
MISSING FOR 25 YEARS

2020

A month-long global lobby on 25th year of Panchen Lama Gedhun Choekyi Nyima's enforced disappearance

UN, EU & Human Rights Desk, Dept. of Information & International Relations, Central Tibetan Administration



Liaison Office of His Holiness The Dalai Lama
for Japan & East-Asia

強い後悔と悲しみをこめて、チベットの第 11 世パンチェン・ラマ・ゲンドゥン・チューキ・ニマが中国政府に拉致されてから、25 年の月日が経ったことをお知らせしなければなりません。この 25 年間、パンチェン・ラマは正当な第 11 世パンチェン・ラマとしての地位どころか、普通の人間として生きる権利さえ奪われ続けています。

25 年という節目に当たり、もう一度この事実を明らかにし、チベットの歴史からパンチェン・ラマ・ゲンドゥン・チューキ・ニマを消そうとする中国の企てにもかかわらず、世界はパンチェン・ラマ・ゲンドゥン・チューキ・ニマを決して忘れてはいない、という強いメッセージ発信していきたいと思い、このメッセージを書いています。

パンチェン・ラマ・ゲンドゥン・チューキ・ニマは、1995 年 5 月 14 日、インドのダラムサラでの式典において、ダライ・ラマ法王によって認定されました。しかしそのわずか 3 日後の 5 月 17 日、中国政府によって両親と共に拉致され、その後今日まで、どこにいるかさえも分からない、消息不明の状態が続いています。中国の行いは、国際的に認められた人権を完全に無視しており、中国の国内法にさえ違反しています。

パンチェン・ラマ・ゲンドゥン・チューキ・ニマは今年の 4 月 25 日で 31 歳になります。「強制失踪からのすべての人を守る宣言」に定義されているように、強制失踪は、失踪させられた人が見つかって、どうなったかがわかるまでずっと続く犯罪です。つまり、パンチェン・ラマ・ゲンドゥン・チューキ・ニマとその両親の強制失踪事件は、1995 年から 25 年間も続いている犯罪なのです。

全てのチベット人にとって、このことは長年続く、最も重く辛い事件であり、このように繰り返され続ける人権侵害は、終わらせなくてはなりません。中国は、パンチェン・ラマ・ゲンドゥン・チューキ・ニマは健康で、普通の生活を送っていると主張しています。しかし、実際に、生きているパンチェン・ラマに会えない限り、そのような主張を信じることはできません。パンチェン・ラマ・ゲンドゥン・チューキ・ニマの強制失踪は、1995 年から「強制的および非自発的失踪に関する国連作業部会」に登録されている、世界で最も古い未解決事件の 1 つなのです。

そこでお願いがあります。中国政府に対し、パンチェン・ラマ・ゲンドゥン・チューキ・ニマとその両親を解放するように、またチャドレル・リンポチェの所在を明らかにするように、働きかけてください。私たちは、貴国の政府と国民が、チベット人や第 11 代パンチェン・ラマの立場に立ち、その人権を守るよう主張し続けてくださると、固く信じております。なぜならパンチェン・ラマとその家族が、世界から隔絶され続けているという事実そのものが、中国政府の主張が偽りであることを証明しているのですから。

ダライ・ラマ法王日本代表部事務所代表 ルントック

真実を知って頂くことが、
チベットが抱えている問題を変える力になると信じて。

パンチェン・ラマ問題とは

パンチェン・ラマはチベットの文化と宗教・政治において、ダライ・ラマ法王に次ぐ最重要の存在ゆえ、その問題は現在も続いている未解決のチベット人弾圧の焦点です。

ダライ・ラマ法王 14 世が認定した
ゲンドゥン・チューキ・ニマ少年

パンチェン・ラマ 10 世（左）とダライ・ラマ法王 14 世（右）。チベット在住の少年時代。

パンチェン・ラマ 10 世（左）とダライ・ラマ法王 14 世（右）。1956 年ともにインド訪問。

パンチェン・ラマは、チベットの文化と宗教、政治において、ダライ・ラマ法王に次ぐ最重要の存在です。歴代のパンチェン・ラマは阿弥陀仏（無量光仏）の化身として信仰されてきました。パンチェン・ラマの位は、1642 年ダライ・ラマ 5 世がゲルク派強化の確立のために、「偉大な学者」を意味するパンチェン・ラマの称号を、師のタシルンポ僧院長に与えたことから始まりました。以来、交互に師となり弟子となり、互いを認証・選定する存在として、仏教と民衆の発展のために両輪となってチベットの地を治めてこられました。仏教を暮らしの軸に据えた国、チベットを加護し、歴代にわたり文化と宗教と政治のリーダーとして、それぞれが身を尽くしてこられたのです。

ダライ・ラマとタシルンポ僧院のパンチェン・ラマ両ラマの宮廷は、その宗教的な役割からも、時には緊張関係にもありましたが、互いの存在を認めあうことで正しい民衆統治にあたってきました。

しかし、隣国の中国は両ラマの、その緊張関係をしばしば利用してきた時代もあります。近代においては、チベットに侵攻した中国が、パンチェン・ラマを利用し、チベット人を分断、その宗教と文化を破壊するための手段とした経緯があります。

現在のダライ・ラマ 14 世の先代はダライ・ラマ 13 世は、世界的に押し寄せた近代化の大波のなかで、パンチェン・ラマ9 世が伝統的関係を崩し、中国へ亡命するのではないかと危惧していました。

ダライ・ラマ 13 世は 1933 年に崩御されました。その後、現在のダライ・ラマ 14 世が 1935 年にアムドでお生まれになりました。1939 年チベットを統治する転生者として布告され、1940 年 2 月にダライ・ラマ 14 世テンジン・ギャツォとしてラサで即位されました。

パンチェン・ラマ 9 世は、1937 年にチベットへ帰国の途中、アムドで亡くなりました。

パンチェン・ラマ 10 世

ダライ・ラマ 14 世が即位した当時から、パンチェン・ラマは転生者が承認される 1944 年まで空位となっていました。このパンチェン・ラマ転生候補者の承認には、当時の中国国内の政治的状況が強く関与していました。

1949 年、国民党（中華民国勢力、内戦で毛沢東の共産党軍と交戦）はラサの中国大使館廃止を受け、チベット侵攻を国内権力闘争の増強策として視野に入れるようになります。その結果　同年 6 月 11 日、国民党政府が転生候補をパンチェン・ラマ 10 世として承認・認可。その後、数週間も経たないうちにアムド（チベット西部）へ侵攻した中国共産党軍によって、占領と同時にパンチェンラマも共産党軍の手中に落ちてしまうという事態が起こりました。

伝統的に互いにチベットを安定して治める両輪であったパンチェン・ラマは、ダライ・ラマの権威失墜に利用されてしまったのです。

1949 年、中国共産党が中国国内の政権につきます。1950 年に中華人民共和国樹立が宣言され、同年、中国はチベット全面侵攻を開始、たちまちチベットのほとんど全土を武力により占領してしまいました。

国外、特にイギリス、インドからの援助の得られない状況の下で、チベット政府は中国と妥協に努めるほかに選択の余地は無く、この状況に対処する試みの一環として、当時 16 歳で全権を掌握していたダライ・ラマ 14 世は、紛争解決を協議するために北京の中国政府に使節団を派遣しました。しかし、激動の時代にあって、このチベット側の試みは事実上紛争解決の協議とは至らず、一国の存在証明として中国が指示した「チベットの平和的解放に関する 17 か条協定」を承認するのみになったのです。

1951 年 5 月 23 日に調印されたこの協定がチベットの独立証明を実質的に終わらせる方向に転じることを危惧したチベット使節団は、在位したパンチェン・ラマ 10 世を承認する状況を受け入れました。

しかしその後も、チベット人をダライ・ラマから引き離すための、中国政府によるパンチェン・ラマ政治利用が続きます。パンチェン・ラマ 10 世はチベット人であっても、侵攻を強く押し進めていた中国政府の権力下、影響の下で育てられました。そのため、パンチェン・ラマ 10 世がチベット人とダライ・ラマへの忠誠心を疑わしく思うようになったのではないかという指摘もありました。パンチェン・ラマ 10 世が本当に中国の道具であったのか否か、それが明らかになってくるのは、まだ先のことでした。

1954 年 9 月第 1 回全国人民代表大会に参加するために北京駅に到着したダライ・ラマ 14 世（左）とパンチェン・ラマ 10 世（右）。

毛沢東中国主席とダライ・ラマ 14 世（右）、パンチェン・ラマ 10 世（左）1954 年。
2 人を北京駅に出迎えた朱徳副主席（右端）と周恩来首相（左端）。

左から、ダライ・ラマ法王 14 世、パンチェン・ラマ 10 世、インド、ネルー首相。亡命前の 1956 年。

1959 年、ラサでの中国の残虐な弾圧を受けて、ダライ・ラマ 14 世は、隣国のインド政府を頼り亡命しました。このことがパンチェン・ラマとの関係に及ぼした影響は非常に大きなものでした。両ラマの個人的な接触が実質的に絶たれる結果となったからです。しかしその一方、中国の支配者にとって、パンチェン・ラマ 10 世は、中国が期待したような単なる傀儡でないことも明らかになってきました。チベット民衆との信仰のつながりを強く保持し、国を加護する統治の足場を崩していなかったのです。

チベット人とダライ・ラマ 14 世が、パンチェン・ラマの心を汲み察すようになってくると、チベットに残ったパンチェン・ラマは位を剥奪され、タシルンポ僧院の僧侶たちは迫害され逮捕されるようになっていきます。さらに 1964 年にラサで催された大祈願祭（モンラム・チェモ）で、パンチェン・ラマ 10 世は、「ダライ・ラマはチベットの真の指導者である」と語りました。中国は彼を 10 年間独房に監禁、生死すら外界に知らせないよう監視下に置きました。

中国政府がようやくパンチェン・ラマを解放し、初めて公式の場に姿を現すことを認めたのは 1978 年2月 25 日、アメリカが中華人民共和国を正式に承認した日のことでした。幽閉から 14 年の歳月が流れていました。

その後、パンチェン・ラマはダライ・ラマにチベットにもどるように呼びかけて、チベットの状態が改善したと宣言しました。抑圧が続くチベットの状況下で、中国はまたもやパンチェン・ラマを利用しようとしたのです。

1989 年1月 28 日、パンチェン・ラマ 10 世は、心臓発作をおこし死亡しました。53 歳でした。ダライ・ラマ法王 14 世は自伝に、彼の死でチベットは「真の自由の闘士を失った」と書き記しています。

現在のパンチェン・ラマ

パンチェン・ラマ 10 世の死で、新たな転生者探索が開始されました。このパンチェン・ラマ 11 世の選定が、チベットの将来にとって重大であることが現在の「パンチェン・ラマ」認証をめぐる政治状況そのものです。ダライ・ラマの権威と、人々が彼に対して抱いている崇敬と、チベットの窮状に向けられた国際社会の注目は、自由なチベットを求める意義と重なった、譲り得ない核心なのです。

中国がチベットを占領している現在、チベットの自由を求める闘いの焦点は、第一に新しい転生者が探索される間のダライ・ラマ不在の空白期間に権威の喪失とチベット人の指導者不在が大変に危惧されるところ、第二に、新しい転生者が布告されれば、ダライ・ラマが完全に責任を果たすことができるようになるまでの間に中国は自由を求めるチベット人を抑圧すること。また、最も憂えるべきことは、中国が既に認定している別擁立のコントロール下に置くパンチェン・ラマを即位させておけば、信仰と結びついたチベット人たちの心を、さらにはダライ・ラマを軸とした統治体制さえも自分たちの制御下に置ける、ということです。

この恐ろしい事態が進めば、先人が命をかけて守ってきた、自由なチベットのための闘いは敗北することになります。中国政府が現在進めようとしているのは、この長期にわたる政治ゲームであることは疑いようも無いことです。

1995 年 5 月 14 日、ダライ・ラマ 14 世は、パンチェン・ラマ 11 世発見を布告し、認証されました。しかし、両親とともにチベットに住んでいた少年ゲンドゥン・チューキ・ニマは、すぐさま中国政府当局によって有罪宣告されてしまいました。さらに中国政府当局によってニマ少年は誘拐され、世界最年少の政治犯として収監されてしまったのです。中国政府当局は、パンチェン・ラマ選定の根拠の無いままに、自分たちが選定した新パンチェン・ラマを布告。ギェンツェン・ノルブという 6 歳の少年の”就任式”が 1995 年 11 月 30 日に行われ、”即位”が 12 月 8 日に行われました。政治犯とされ、誘拐されたパンチェン・ラマ、ニマ少年の所在はわからないままでした。

1996 年 6 月、所在不明としてきた中国側がようやく矛盾のなかで少年を拘留していることを認めました。中国が示したゲンドゥン・チューキ・ニマ少年の拘留の理由は「チベット人民族主義者たちによる誘拐を防ぐため」というものでした。しかしその後の進展は全くありません。パンチェン・ラマはいまだに中国によって拘留されているということになります。

中国がパンチェン・ラマ拘留を認めたことで、彼の生存と身の安全に関する憂慮が常に発生しています。いまだに中国側はパンチェン・ラマを釈放する発表をしていません。その一方で、中国は自らが任命した「パンチェン・ラマ」の肖像をチベット全土で掲示させる計画を発表しています。「パンチェン・ラマ」が今もなおチベットでダライ・ラマへの信仰を禁止する手だてとなっているのが現状です。

それゆえ、「パンチェン・ラマ」問題は、解決に向かうまで継続する必要があります。

擁立が、ダライ・ラマ法王と彼の影響力を阻む道具となり、平和的で正当なチベット人の願いを無視した抑えつけの武器として、今もなお強行されているのです。このことは、チベット人が弾圧され続けていることを、世界に向けて明らかに証明しています。

参考：ダライ・ラマ法王日本代表部事務所ホームページ／パンチェン・ラマについて
https://www.tibethouse.jp/about/information/panchen_lama/pl.html

パンチェン・ラマ11世 ゲドゥン・チューキ・ニマ強制失踪 25年目の国際陳情

チベット亡命政権　情報・関係省　国連欧州連合・人権担当提案

●中国政府に対して、独立した実情調査団がゲドゥン・チューキ・ニマとその両親に面会することがきるよう強く求め、検証可能な情報と明確な証拠に基づいて実際の状況を究明する。

●中国政府に対して、パンチェン・ラマとその両親を無条件で速やかに解放し、パンチェン・ラマがタシルンポ僧院に帰還して、宗教的指導者としてのきわめて重要な役割を果たすことができるよう強く求める。

●中国政府に対して、チャデル・リンポチェをはじめ、政治犯として拘束されているチベット人を全員釈放するよう強く訴える。

●中国政府に対し、信仰の自由を順守している証として、チベットにおける信仰の自由を保証するとともにパンチェン・ラマ 11 世を解放するよう強く求める。

●あなたの国の政府などに対して、目に余る人権侵害を商業や産業によって覆い隠すことはできないことを中国政府にわかりやすく伝えてもらうよう呼び掛ける。

注記：従来、私たちが「チベット」と言うときには、アムド、カム、ウ・ツァンの3域を含む広域を指しますが、中国による侵攻後は、チベット自治区、四川省・青海省・甘粛省・雲南省のチベット自治区郡県に分割されています。

はじめに

中国が不法にチベットを占領して以降、60 年以上にわたって、チベットの人権状況は深刻化しています。中国は、国連憲章をはじめとする国際的な条項に人間の普遍的権利として掲げられている人権を有する国になることはできませんでした。中国政府は自国の法律や憲法を順守しておらず、国連事務局やさまざまな国の政府がチベット人の自由と人権を尊重するよう求めても、応じることはありませんでした。そうしたなか、多くの政府や国連の委任を受けた専門家たちが一貫して繰り返し表明してきた懸念のひとつが、1995 年 5 月 17 日に中国当局によって拉致されたまま行方がわからなくなっているチベットのパンチェン・ラマ 11 世ゲドゥン・チューキ・ニマの安否です。

今年、ゲドゥン・チューキ・ニマは 31 歳になります。また今年で、強制失踪から 25 年になります。つまり最後にニマ少年の姿が確認されてから、25 年もの長い年月が流れたのです。

パンチェン・ラマ11世 ゲドゥン・チューキ・ニマ強制失踪と人権問題

チベットのパンチェン・ラマ 11 世として認定されたゲドゥン・チューキ・ニマは、1989 年 4 月 25 日に父クンチョク・プンツォクと母デチェン・チョドンの息子としてナクチュに生まれました。1995 年 5 月 14 日、ダライ・ラマ法王は、インドのダラムサラで行なわれた式典の中で「ゲドゥン・チューキ・ニマは、パンチェン・ラマの真の転生者である」と発表されました。

その数日後の 5 月 17 日、ゲドゥン・チューキ・ニマとその家族は中国政府によって拉致され、外部との接触が断たれた強制失踪の状態に置かれています。これは国際的な人権基準も、中国の法規制も完全に無視した行為です。ゲドゥン・チューキ・ニマが「消えて」しまってから、その姿を見た人はひとりもいません。中国政府は、6 歳の少年が隔離状態にあるのは彼自身のためであり、両親の希望とも一致していると主張しました。

多くの国連加盟国や人権専門家たちがパンチェン・ラマ 11 世ゲドゥン・チューキ・ニマの事件を重要な問題として取り上げてきました。最初にこの事件を取り上げたのは「子どもの権利委員会（CRC）」で、1996 年 5 月にスイスのジュネーブで開催された国連の「第1回中国に関する定期レビュー」の中でのことでした。同じく 1996 年には、「強制的・非自発的失踪に関する国連作業部会（WGEID）」もこれを取り上げました。

当初、中国政府はゲドゥン・チューキ・ニマとその両親の拘束を否定していました。強制的・非自発的失踪に関する国連作業部会（WGEID）が中国政府から受け取った1995年6月20日付けの返答には、「パンチェンの転生児の家族が誘拐され、失踪したという事件は発生していない。このような失踪の話は、ダライ（ラマ）集団の政治的意図による単なるでっちあげである」と報告されていたのです。

1996年の定期レビューでは、スウェーデン出身で子どもの権利委員会（CRC）のトマス・ハマーベリ氏も「チベットの問題について建設的な提言を行なうための、第三者による実状調査団の訪問を中国政府に受け入れてもらえないか」中国の代表者に尋ねました。ポルトガル出身でCRCのサントス・パイス氏も懸念を表明し、「中国当局は、パンチェン・ラマの転生者としてチベット人が選んだ少年が隔離状態に置かれているのは彼自身のためであり、両親の希望と一致していると言うが、どうやってそれを確かめることができるのか」と中国の代表者に質問しました。

また、子どもの権利委員会（CRC）は「次のパンチェン・ラマとしてダライ・ラマが選んだ少年の安否を憂慮するとともに、すべてのチベット人の子どもたちのことを懸念している」と述べました。以来、CRCは繰り返し懸念を表明し、パンチェン・ラマ11世の健康状態や居所に関する情報を中国政府に求めてきました。

2005年、「第2回中国に関する定期レビュー」において提起された疑念に対する答えとして、中国大使は「ダライ・ラマによるパンチェン・ラマの任命は違法である。少年はごく普通のチベット人であり、健やかに、ごく普通に中国で暮らしている」と国連の沙祖康（シャ・ズカン）氏に伝えました。それから何年にもわたって、中国はこの主張を繰り返してきました。

信仰の自由に関する国連特別報告者もまた、中国側のパンチェン・ラマ転生者探索委員会の委員長を務めたチャデル・リンポチェの恣意的逮捕の取り下げと、ゲドゥン・チューキ・ニマの幸福を繰り返し中国に求めてきました。チャデル・リンポチェが逮捕されたのは、ゲドゥン・チューキ・ニマが次のパンチェン・ラマになることをダライ・ラマ法王が布告してからわずか数日後のことでした。そしてニマ少年の失踪からおよそ2年になろうとしていた1997年4月21日、チャデル・リンポチェは「国家分裂謀議」と「国家機密漏洩」の罪で7年間の禁固刑を宣告されたのです。

中国政府は2007年7月の返答の中で、「ゲドゥン・チューキ・ニマはごく普通のチベット人の青年である。健康状態は非常に良く、ごく普通に幸せな暮らしを送っており、優れた教育としつけを受けている」と主張しました。

2013年、中国の代表者は「ゲドゥン・チューキ・ニマは、中国人の一般市民と同じように暮らしている。彼は中国で義務教育と高等教育を受けており、健やかに、ごく普通の人生を送っている。彼とその家族は、第三者による立ち入りを望んでいない」と子どもの権利委員会に伝えました。

2019年9月2日、中国政府は通常の返答に加えて、ゲドゥン・チューキ・ニマの新たな情報を伝えてきました。「個人的な努力の結果、彼は大学へ行った。目下、仕事も見つけている。仕事に専念し、外部の干渉なしに静かに暮らしたい、と彼は言っている」。この返答には、さらに次のような主張もありました。「ダライ・ラマがゲドゥン・チューキ・ニマをパンチェン・ラマ11世として認定したことは違法である。中国政府は、これ以上国際社会がゲドゥン・チューキ・ニマをパンチェン（ラマ）とみなさないことを期待する」

まとめ

チベットのパンチェン・ラマ11世ゲドゥン・チューキ・ニマの強制失踪が発生してから、そして強制的・非自発的失踪に関する国連作業部会（WGEID）が強制失踪番号22868の事件として解決に着手してから24年の年月が経ちました。国連をはじめとする国際社会の度重なる要請にもかかわらず、1995年以降、中国政府がゲドゥン・チューキ・ニマの状況を明らかにすることはありませんでした。

中国政府は、独立した専門家がゲドゥン・チューキ・ニマと彼の両親に会うことを許可して、中国政府が提供した情報が真実であることを確認してもらわなければなりません。チャデル・リンポチェの安否についても、独立した専門家に確認してもらわなければなりません。

つきましては、国連加盟国ならびに国連の人権専門家の皆様には、中国政府に対し、チベットのパンチェン・ラマ11世ゲドゥン・チューキ・ニマの強制失踪について引き続き提起いただくとともに、ゲドゥン・チューキ・ニマが無事で満足のいく状態にあることを確認するための独立した専門機関の訪問を認めるよう、中国政府に強く求めていただきたいと思います。

パンチェン・ラマ問題の解決を支援している国

I. 国連においてチベットへの支持を表明した国連加盟国

1) **オーストラリア**
2) **カナダ**
3) **チェコ共和国**
4) **デンマーク**
5) **EU**（欧州連合に加盟する 27 の国々）
6) **フィンランド**
7) **フランス**
8) **ドイツ**
9) **アイスランド**
10) **日本**
11) **オランダ**
12) **ニュージーランド**
13) **ノルウェー**
14) **ポーランド**
15) **スウェーデン**
16) **スイス**
17) **イギリス**
18) **アメリカ**

II. 過去にチベットに関連する問題についてさまざまな情報を発信した国連の人権専門家
（特別報告者とワーキンググループ）

1) 強制的および非自発的失踪に関する国連作業部会
2) 恣意的拘禁に関する国連ワーキンググループ
3) 文化に関する権利の分野における国連特別報告者
4) 拷問およびその他の残酷かつ非人道的な行為や処罰に関する国連特別報告者
5) 意見と表現の自由に関する国連特別報告者
6) マイノリティ問題に関する国連特別報告者
7) 信教または信仰の自由に関する国連特別報告者
8) 一定の住環境や生活水準を維持する権利とその差別に関する国連特別報告者
9) 安全、衛生、健康、持続可能な環境に関する国連特別報告者
10) 人権擁護家の状況に関する国連特別報告者
11) 人種差別や様々な現代型の人種差別、外国人排斥やそれに伴う不寛容に関する国連特別報告者

III. その他

チベットやダライ・ラマ法王、チベット中央政権に連帯と支持を表明している国々

1) **オーストリア**
2) **ベルギー**
3) **イタリア**
4) **ボツワナ**
5) **ラトヴィア**
6) **スロヴァキア**
7) **エストニア**
8) **インド**
9) **メキシコ**
10) **ハンガリー**

以上

世界で共有されている 2020 年におけるキャンペーン。

25 Facts about the 11th Panchen Lama on 25th Year of His Disappearance

1. The 11th Panchen Lama, Gedhun Choekyi Nyima was born on 25 April 1989 in Lhari Dzong of Nagchu in Tibet.
2. His parents were Dechen Chodron and Kunchok Phuntsok.
3. As soon as he was able to speak, he said "I am the Panchen. My monastery is Tashilhunpo. I sit on a high throne and my monasteries are in Tsang, in Lhasa and China."
4. The 10th Panchen Lama, Lobsang Trinley Lhundup Choekyi Gyatso, a staunch critic of China's misrule on Tibet died on 28 January 1989 under mysterious circumstances.
5. Soon after his death His Holiness the Dalai Lama appealed to the Chinese authorities to allow His representatives from to conduct prayers in Tashilhunpo for the 10th Panchen Lama. China rejected the request.
6. In 1991 His Holiness the Dalai Lama expressed His wish to assist in the search for the reincarnation of the 10th Panchen Lama which China rejected saying there is no need for "outside interference".
7. China constituted a search committee for the reincarnation of the Panchen Lama under the leadership of Gyayak Rinpoche, tuter of the 10th Panchen Lama.
8. After the death of Gyayak Rinpoche, Chadrel Rinpoche, the abbot of Tashilhunpo Monastery, was appointed as the head of the Search Committee in 1991.
9. Chadrel Rinpoche sent a petition to His Holiness the Dalai Lama with updates on the Search Committee's progress with the list of potential candidates.
10. His Holiness the Dalai Lama replied to Chadrel Rinpoche's petition via official channels requesting the Search Committee he allowed to come to India. China rejected the request once again.
11. His Holiness conducted elaborate religious rites and traditional Tibetan religious practices to identify the reincarnation of the 10th Panchen Lama.
12. On 14 May 1995, His Holiness the Dalai Lama announced Gedhun Choekyi Nyima as the 11th Panchen Lama.
13. China rejected His Holiness Dalai Lama's announcement and recognition of the 11th Panchen Lama.
14. Within three days of the announcement, Panchen Gedhun Choekyi Nyima and his parents were abducted by the Chinese authorities.
15. At the age of six, Panchen Gedhun Choekyi Nyima became the youngest political prisoner in the world.
16. Chinese authorities removed Chadrel Rinpoche as head of the Search Committee and he "disappeared".
17. About two years later, on 21 April 1997, Chadrel Rinpoche was sentenced to six years imprisonment, and house arrest in isolation upon his "release" since 2002, after which there has been no confirmed report on his whereabouts.
18. Chinese authorities reconstituted the Search Committee and conducts its own appointment process for 11th Panchen Lama.
19. Chinese authorities rigged their own procedure to install their candidate, Gyaltsen Norbu, son of communist party members, as the Panchen Lama.
20. Various world governments, civil society groups and international organizations including UN Special Rapporteurs have repeatedly called upon China to reveal the whereabouts of the 11th Panchen Lama Gedhun Choekyi Nyima.
21. As many as close to 40 international indictments were made since the enforced disappearance of Gedhun Choekyi Nyima calling for the release and well-being of him and his family.
22. China has maintained that Gedhun Choekyi Nyima and his parents, who have not appeared in public since 1995, "do not want to be interrupted" by any "external environment", and that "he has a very good life".
23. Even after 25 years of enforced disappearance, there is no verified information available on his whereabouts.
24. As the 11th Panchen Lama Gedhun Choekyi Nyima turned 31 years of age this year, the search for him continues.
25. In November 2019, the Chinese government stated that Gedhun Choekyi Nyima received free compulsory education when he was a child, like any other ordinary citizen of China. He went to university and currently he has found a job. He expressed that he would like to focus on his job and live a quiet life without external interference.

UN, EU & Human Rights Desk
Dept. of Information & International Relations
Central Tibetan Administration

行方不明になってから 25 年がたつ

パンチェン・ラマ11世に関する 25の事実

チベット中央政権情報・国際関係省
国連、EU、人権デスク

1 パンチェン・ラマ 11 世ゲンドゥン・チューキ・ニマは、1989 年 4 月 25 日、チベットのナクチュ市ラリ県に生まれた。

2 両親は、デチェン・チュドンとクンチョク・プンツォクである。

3 言葉が話せるようになると、「僕はパンチェン。僕の僧院はタシルンポ。僕は玉座に座る。僕の僧院は、ツァン、ラサ、中国にある。」と話した。

4 パンチェン・ラマ 10 世ロブサン・ティンレー・ルンドゥプ・チューキ・ギャルツェンは、中国によるチベットの不当な統治を批判してきたが、1989 年 1 月 28 日不可解な死を遂げた。

5 パンチェン・ラマ 10 世の死後、ダライ・ラマ法王は中国政府に対し、パンチェン・ラマ 10 世の葬儀を行うべく、ダライ・ラマ特使をタシルンポに派遣するための許可を求めた。中国政府はこの要求を拒否した。

6 1991 年、ダライ・ラマ法王は、パンチェン・ラマ 10 世の転生者探しの支援をしたいと表明した。中国政府は外部の干渉は不要として、これを拒否した。

7 中国政府は、パンチェン・ラマ 10 世の指導役であったギャヤ・リンポチェを委員長とするパンチェン・ラマ転生者捜索委員会を設立した。

8 ギャヤ・リンポチェの死後の 1991 年、タシルンポ僧院の僧院長チャデル・リンポチェが捜索委員会の委員長に任命された。

9 チャデル・リンポチェは、転生者の候補のリスト、捜索委員会の最新情報を添付した嘆願書をダライ・ラマ法王に送った。

10 チャデル・リンポチェからの嘆願書を受け取ったダライ・ラマ法王は、公式ルートを通じて、捜索委員会のインド訪問が許可されるよう求めた。中国政府はこの要求を拒否した。

11 ダライ・ラマ法王は、パンチェン・ラマ 10 世の転生者を特定すべく、入念な宗教儀式、伝統的なチベット仏教の慣習を行った。

12 1995 年 5 月 14 日、ダライ・ラマ法王は、ゲンドゥン・チューキ・ニマをパンチェン・ラマ 11 世と発表した。

13 中国政府は、ダライ・ラマ法王の発表とパンチェン・ラマ 11 世の認定を拒否した。

14 ダライ・ラマ法王の発表から 3 日後、パンチェン・ラマ 11 世ゲンドゥン・チューキ・ニマは両親もろとも中国当局に拉致された。

15 パンチェン・ラマ 11 世ゲンドゥン・チューキ・ニマは、6 歳にして世界最年少の政治犯となった。

16 中国政府は、チャデル・リンポチェを捜索委員会の委員長から解任した。チャデル・リンポチェは「行方不明」となった。

17 それから 2 年後の 1997 年 4 月 21 日、チャデル・リンポチェは懲役 6 年の判決を受けた。2002 年に「釈放」されたが、自宅軟禁に置かれている。それ以降、チャデル・リンポチェの状況が確認できる報告はない。

18 中国当局は、自身でパンチェン・ラマ 11 世を認定すべく、転生者捜索委員会を再設立した。

19 中国当局は、中国共産党員の息子であるギャルツェン・ノルブを転生者とすべく、認定プロセスを不正操作した。

20 国連特別報告者を含む様々な政府、市民団体、国際組織が、中国政府に対し、パンチェン・ラマ 11 世ゲンドゥン・チューキ・ニマの状況を明らかにするよう繰り返し求めている。

21 ゲンドゥン・チューキ・ニマの失踪以降、ゲンドゥン・チューキ・ニマと家族の釈放・幸福な暮らしを求める起訴状が 40 近く出されている。

22 1995 年以降公の場に姿を見せていないゲンドゥン・チューキ・ニマと両親は、「外部の環境によって妨害されることを望んでいない」、「とてもいい暮らしを送っている」と、中国政府は主張してきた。

23 強制失踪から 25 年もの年月が流れても、ゲンドゥン・チューキ・ニマの状況が確認できる情報はない。

24 今年、パンチェン・ラマ 11 世ゲンドゥン・チューキ・ニマは 31 歳になる。彼の捜索は今なお続いている。

25 2019 年 11 月、ゲンドゥン・チューキ・ニマは他の中国の市民同様、子供の頃に義務教育を受けたと中国政府は発表した。大学にも行き、現在は職にも就いているという。仕事に集中し、外部から妨害されることなく静かな生活を送りたがっていると中国政府は主張している。

ゲンドゥン・チューキ・ニマに関する国際起訴

複数の国の人権団体が、ゲンドゥン・チューキ・ニマの解放と安否確認を繰り返し求めているほか、世界の多くの政府が彼の拘束に関する声明を発表している。しかし、過去 25 年間にわたり誰一人として彼に面会を許されていない。彼が拉致された直後から、一連の国際起訴が行われている。

1. 1995 年 5 月 17 日、米国国務省は、ダライ・ラマ法王が認定したパンチェン・ラマを中国が拒否したことに反応を示し、チベット仏教徒の宗教的信条と慣習を尊重する中国政府の取り組みに対し、疑問を呈した。

2. 1995 年 11 月 30 日、オーストラリア上院でボーン上院議員が決議案を提出した。ダライ・ラマ法王によるパンチェン・ラマの認定を覆そうとする中国の行動に遺憾の意を示し、ダライ・ラマ法王が認定したパンチェン・ラマを支持することでチベット人の意志を尊重するよう中国に要請するものだった。

3. 1995 年 12 月 13 日、米国上院で合同決議案が提出された。チベットにおけるパンチェン・ラマの転生者の認定は常にダライ・ラマ法王の権限の範囲内であるとし、米国政府が中国の政府にチベット人の意志を尊重するよう働きかけ、ダライ・ラマ法王が認定したパンチェン・ラマを支持するよう求めるものだった。

4. 1995 年 12 月 14 日、欧州議会は、中国がダライ・ラマ法王によるパンチェン・ラマの転生者認定を拒否しようとしていること、チベット人の宗教的伝統を無視して、常に純粋に宗教的であった問題を政治化しようとしていることに言及した決議案を可決した。これにより、チベットの宗教問題への中国の介入と、中国当局による転生者の強制指名を非難した。また、EU の外交官とゲンドゥン・チューキ・ニマとその両親との面会の許可を中国に要求するものだった。

5. 1995 年 12 月 1 日、フランス国会のチベット問題に関する研究会、国民議会、国会チベット友好協会は、中国当局によるパンチェン・ラマの発表を非難した。

6. 1996 年 1 月 15 日、チベットのための全党インド議会フォーラムは、中国政府がチベット人に対して別のパンチェン・ラマを認定したことを受け、プレスリリースにおいて遺憾と懸念を表明した。同フォーラムはインド政府に対し、幼いパンチェン・ラマの安否に関する問題を中国政府の最高レベルと交渉することを要請した。

7. 1996 年 1 月 15 日、チベット国際議員委員会はプレスリリースで、ゲンドゥン・チューキ・ニマの安否についての懸念を表明した。同委員会は、ゲンドゥン・チューキ・ニマに何かが起こった場合には中国政府に責任があるとした。

8. 1996 年 1 月 18 日、アムネスティ・インターナショナルは、行方不明のパンチェン・ラマに関する懸念を表明した。同組織は、「6 歳のチベット人の少年とその家族が自宅から行方不明となり 8 か月が経過し、当局の管理下にある可能性があることを深く懸念している」と述べた。

9. 1997 年、欧米 2 団体のチベットへの代表団は、パンチェン・ラマ 11 世について矛盾する情報を得た。オーストリア代表団は、少年がラリ郡（彼の出身地）にいると伝えられ、米国代表団は少年が北京にいると伝えられた。

10. 1997 年 4 月 23 日から 24 日、チベットに関する第 3 回世界議会議員会議がワシントン D.C. で開催された。同会議では、宗教的プロセスであるパンチェン・ラマの認定への中国の干渉とゲンドゥン・チューキ・ニマの拘束に対する遺憾の意が示された。

11. 1998 年 9 月 17 日、両院一致決議案（S. Con. Res. 103）が米国議会で可決された。決議は中国に対し、ゲンドゥン・チューキ・ニマを解放し、干渉を受けることなく伝統に従って宗教的学習を行えるよう要求するものだった。

12. 2001 年 2 月 17 日から 18 日、代表なき国家民族機構（UNPO）はエストニアのタリンにおいて第 6 回総会を開催した。 UNPO は、ゲンドゥン・チューキ・ニマを含む政治犯とされる者の拘束に深い懸念を表明し、中国政府に対し、前提条件を設けずにダライ・ラマ法王との交渉を開始するよう求めた。

13. 2000 年 10 月、イギリス当局がパンチェン・ラマの問題を提起すると、少年は元気に学校に通い、両親は国際メディアが少年の日常生活に介入することを望まないと伝えられた。パンチェン・ラマ 11 世とされる 2 枚の写真が提示されたが、写真を持ち帰ることは許可されなかった。

14. 2001 年 8 月、ラサを訪問したポーランド議会代表団は、6 週間以内にパンチェン・ラマ 11 世の写真の提示を約束されたが、後に、両親が外部からの干渉を望んでいないと伝えられた。2001 年 10 月と 2002 年 3 月にもそれぞれオーストラリアとヨーロッパの議員代表団がパンチェン・ラマの所在について尋ねたが、両親が日常生活への干渉を望まないと伝えられた。

15. 2002 年 1 月 23 日、米国は 2003 会計年度の外交承認法を制定した。同法の第 621 条チベットの宗教的迫害に基づき、在中国米国大使に、パンチェン・ラマ 11 世と面会してその所在と安否を確認し、拘束から解放させ、干渉を受けることなく伝統に従って宗教的学習を行えるよう要求した。

16. 2002 年 10 月、米国下院は決議案 H. Res. 410 を可決した。クリストファー・スミス下院議員

が 5 月 4 日に提示したこの決議案は、パンチェン・ラマの解放を求めるものだった。決議案には次のように記されている。「…ゲンドゥン・チューキ・ニマは、ダライ・ラマによってパンチェン・ラマとして認定された直後、1995 年 5 月 17 日、6 歳で中国当局によって自宅から連れ去られた。パンチェン・ラマの強制失踪は、中華人民共和国が加盟する国際人権規約に定められた基本的自由に違反する。この規約には、子どもの権利条約も含まれる。」「……江沢民国家主席は、パンチェン・ラマに対する議会の懸念を認識すべきである…」「…中華人民共和国政府は、(A) パンチェン・ラマを解放し、彼がチベットのタシ・ルンポ僧院で伝統的な役割を執行できるようにすべきである ...」

17. 2005 年 6 月 9 日、ゲンドゥン・チューキ・ニマの失踪から 10 年、信仰や宗教の自由に関する特別報告者は、次の通り発信した。当時 6 歳だったゲンドゥン・チューキ・ニマは、ダライ・ラマ法王により転生パンチェン・ラマ 11 世に認定された 3 日後の 1995 年 5 月 17 日、チベットのラリから両親とともに消息を絶った。彼らの所在はわかっていない。特別報告者はまた、「独自の儀式に従って聖職者を決定する権利を有しながら宗教指導者を奪われたチベット仏教徒の信仰の自由に対する重大な干渉」の懸念を表明した。

18. 2005 年 9 月 7 日、中国政府は特別報告官の発信に反応した。その回答として、「ゲンドゥン・チューキ・ニマはパンチェン・ラマではなく、普通の子供である。彼は健康で、他の子供と同じく普通の生活を送り、優れた文化教育を受け、中学校に通っている。彼と家族はいかなる干渉も望まない」と述べた。特別報告者は、中国政府がゲンドゥン・チューキ・ニマに関して提供した情報に言及したが、この情報を独立した専門家が確認することはまだ不可能であることに懸念を表明し、独立した専門家が彼を訪問して彼と両親の安否確認を許可されるべきだと述べた。

19. 2005 年 11 月 19 日、スコットランドのエジンバラで第 4 回チベットに関する世界議会議員会議が開催された。この会議では、中国が政治犯、特にパンチェン・ラマ 11 世であるゲンドゥン・チューキ・ニマの解放を拒否したことを非難し、パンチェン・ラマの解放を要求した。

20. 2006 年 4 月 6 日、ニューヨークを本拠地とするヒューマンライツ・ウォッチは、当時の米国大統領ジョージ・W・ブッシュに、2006 年 4 月 20 日にワシントン DC で行われる当時の中国の胡錦濤国家主席との首脳会談の中でパンチェン・ラマ問題を提起するよう要請した。ヒューマンライツ・ウォッチは、次のように記している。「中国政府は未成年者の宗教教育を制限しないと公に主張しているが、そのような制限（法律上または実際にあるかどうかにかかわらず）は一部の地域で現在も存在する」「…10 年前、中国政府はチベット人からパンチェン・ラマを選択する権利を奪い、ダライ・ラマが認定した幼いパンチェン・ラマとその家族を拘束した。彼らの所在は不明のままである。2005 年、中国政府はパンチェン・ラマについて『チベット仏教最高位の人物』と言及したが、この言葉はそれまでダライ・ラマ以外の誰にも与えられたことはない」 ヒューマンライツ・ウォッチは米国大統領に対し、胡主席に、ダライ・ラマが認定したパンチェン・ラマに子どもの権利委員会のメンバーが連絡を取る許可を得るよう要請した。

21. 2007 年 4 月 25 日、米国国際信教の自由委員会の元委員長フェリーチェ・D・ゲールは、「チベットと中国における宗教の自由」についての人権議員連盟のブリーフィングの中で声明を発表した。彼女は、「私はパンチェン・ラマであるゲンドゥン・チューキ・ニマの事件を取り上げ、議会のメンバー、政治家、外交官、NGO、一般の人々など非常に多くの人々から要求があるにもかかわらず、誰一人として彼やその家族に会えていないのか尋ねた」「米国とその同盟各国は、パンチェン・ラマが独立した国際的なオブザーバーと自由に面会することを中国が許可するよう、再度主張しなければならない」

22. 2008 年 11 月 3 日から 21 日、国連拷問禁止委員会（CAT）は、第 41 回会議をジュネーブで開催した。中国に関する結論の所見において、委員会はチベット人を含む中国の民族的、民族的または宗教的少数派に対する懸念を提起した。委員会は、中国は強制失踪を禁止および / または防止し、ゲンドゥン・チューキ・ニマを含む行方不明者の安否を明らかにするために必要なすべての措置を実行するべきである、この慣習はそれ自体が条約の違反となる、と述べた。

23. 2009 年 3 月 11 日、米国議会は、ダライ・ラマ法王が亡命を余儀なくされ、チベット問題に関する平和的な解決策を求めてから 50 周年を迎えるチベット人の窮状を認識した決議案 H. Res. 226 を採択した。この決議は、パンチェン・ラマ 11 世ゲンドゥン・チューキ・ニマの失踪の問題を再認識した。

24. 2011 年 4 月 8 日、国連の専門家グループが中国で発生したとされる強制失踪について深い懸念を表明し、関係国の当局に強制的に失踪したすべての人々を解放するよう求めた。ジュネーブで行われた記者会見の中でワーキンググループは、「受け取った申し立てによると、中国では強制失踪のパターンがあり、反抗の疑いのある人々は極秘の拘束施設に連行され、多くの場合は拷問、脅迫された後、解放されるか、「軽度の拘束」を受け、外界との接触を禁止される」とされている。ワーキンググループはまた、パンチェン・ラマ 11 世の事件について懸念を表明し、「中国当局は彼を連行したと認めているが、彼の安否や所在についての情報公開を拒否し続けたため、強制失踪と判断された。国連拷問委員会、国連子どもの権利委員会、信教や信仰の自由に関する特別報告者など、人権団体の多くは、彼の所在を明らかにするよう求めたが、実現されていない」と伝えている。専門家団体はまた、中国は最高基準の人権基準を遵守する義務があり、国連の特別な手続き、特にワーキンググループに全面的に協力すべきであると表明した。

25. 2012 年 5 月、国際被抑圧民族協会は「チベットにおける人権危機：ヨーロッパは行動しなければならない！」と題する報告書を発表した。この報告書はチベットにおける様々な人権問題に焦点をあて、強制失踪に関する国連作業部会から引用し、行方不明のパンチェン・ラマの安否についての懸念を提起し、逮捕されたチベット人たちの強制失踪は 2008 年のチベット蜂起に続いて大きな懸念となったとしている。この報告書は、ヨーロッパ各国政府および欧州連合の加

盟国に対し、ゲンドゥン・チューキ・ニマの解放を求めるよう提唱した。

26. 2012 年 6 月、欧州議会はチベットの人権状況に関する決議を可決した。決議は、パンチェン・ラマ 11 世の安否と所在を明らかにするよう中国当局に求めることを繰り返し表明するものだった。

27. 2013 年 9 月、国際人権連盟とチベットのための国際キャンペーンは、チベット仏教に対する北京の弾圧に関する報告を発表した。報告書はパンチェン・ラマの問題を提起し、国家による拘束からの解放を求めた。報告書はまた、中国政府にパンチェン・ラマが宗教指導者としての正当な地位を引き継ぐために必要な宗教教育を受けられることを許可するよう求めた。

28. 2013 年 10 月 29 日、国連児童の権利委員会は、2013 年 9 月 16 日から 10 月 4 日まで開催された第 64 回会期中に採択された中国の第 3 と第 4 の定期報告について結論をまとめた。委員会は、「…1995 年に 6 歳で姿を消したゲンドゥン・チューキ・ニマについて、中国共産党は多少の情報を提供しているものの、独立した専門家の訪問および所在の確認を許可していないという状況である」とした。委員会は、中国が年齢にかかわらずチベット人の子供が宗教活動に参加したり、宗教教育を受けたりすることを禁止するすべての措置と制限を廃止し、独立した専門家がゲンドゥン・チューキ・ニマを訪問し、生活状況を確認することを直ちに認めるべきであると提唱した。

29. 2013 年の米国国際信教の自由委員会（USCIRF）の年次報告には、信仰およびその他の活動のために拘束された個人として、ゲンドゥン・チューキ・ニマを挙げている。また、中国政府は若いゲンドゥン・チューキ・ニマへの取り次ぎを繰り返し求める国際的な要求を拒否し続けているとしている。また報告書では、「中国のチベット仏教地域における宗教の自由の状況は、過去 10 年間のどの時点よりも現在は悪化している」と伝えている。

30. 2014 年 7 月 28 日、ケリー米国国務長官は 2013 年国際宗教自由報告書を米国議会に提出した。報告書は、ゲドゥン・チューキ・ニマの行方が依然として不明であることを強調している。

31. 2014 年 9 月 12 日、国連人権理事会は、強制失踪に関する作業部会の議長と報告者との対話を行った。対話式の対話の中で、アジア先住民部族民族ネットワークは中国での強制失踪について懸念を表明し、ワーキンググループの訪問要請に積極的に対応するよう中国に要請しました。それはまた、パンチェン・ラマと彼の家族の失踪の未解決のケースに取り組むようワーキンググループに要請しました。

32. 2017 年 4 月 25 日、米国国際宗教自由委員会テンジン・ドルジー委員は、パンチェン・ラマの 28 歳の誕生日に公開された書簡で、「6 歳の幼い子供のときに拉致されて以来、中国政府はあなたの安否や所在に関する基本的な情報すら提供することを拒否しています」と述べている。

33. 2017 年 5 月 2 日、ジム・マクガバン議員とイリアナ・ロス・レティネン議員が下院で発言し、チベット本土の状況について懸念を表明した。マクガバン下院議員は、「22 年前、ゲドゥン・チューキ・ニマは 6 歳のときに中国当局に拘束されたのは、ダライ・ラマがパンチェン・ラマの転生であると認定したたった 3 日後のことだった。現在、彼は世界最長の政治犯の 1 人である。中国は彼の所在の詳細を提供することを拒否した。明確にしておきたいが、中国政府には、チベットの宗教指導者の転生者も、パンチェン・ラマや次期ダライ・ラマを指名する権利や権限も、有していない」

34. 2017 年 9 月 18 日、カナダのクリスティア・フリーランド外務大臣は、中国に対し、国連の人権高等弁務官と国連の宗教と信仰の自由に関する特別報告者がゲンドゥン・チューキ・ニマを訪問することを許可するよう求めた。カナダ国会議員ランドール・ギャリソンが提出した質問に応えて、フリーランド大臣は次のように述べた。「カナダは中国に対し、ゲドゥン・チューキ・ニマと両親の所在、ゲドゥンが修了した教育のレベル、および彼と両親の帰国予定日について情報を求めた」

35. 2018 年 4 月 25 日、パンチェン・ラマであるゲンドゥン・チューキ・ニマの 29 歳の誕生日に、米国上院は満場一致で議決案 S.Res.429 を可決し、チベットの宗教的プロセスにおける中国政府によるいかなる干渉も「無効」とした。また、在中国米国大使に、家族と共に 23 年前に姿を消したパンチェン・ラマ 11 世ゲンドゥン・チューキ・ニマに面会するよう求めた。

36. 2018 年 4 月 25 日、米国政府は「20 年以上前に 6 歳で中国政府によって拉致されたと伝えられて以来、公の場に姿を見せない」パンチェン・ラマ 11 世ゲンドゥン・チューキ・ニマの誕生日を祝った。米国国務省の報道官ヘザー・ナウアートは、中国当局がラルンガル僧院やヤチェンガル僧院などの信者が多く暮らす地域の継続的な破壊を含め、チベット人の宗教的、言語的、文化的アイデンティティを排除するために取った措置について懸念を表明する声明を発表した。また、中国に対し、「ゲンドゥン・チューキ・ニマを直ちに解放し、すべての人々の宗教の自由を促進するという国際的な約束を守ること」を求めた。

37. 2019 年 4 月 25 日、トム・ラントス人権委員会の共同議長であり、中国問題に関する連邦議会・行政府委員会の議長であるジェームズ・P・マクガバン下院議員は、チベット仏教パンチェン・ラマ 11 世ゲンドゥン・チューキ・ニマの 30 歳の誕生日を祝して、次の声明を発表した。「ゲンドゥン・チューキ・ニマはダライ・ラマ法王によって、1995 年 5 月 15 日、6 歳でパンチェン・ラマ 11 世に認定された。その 2 日後、中国政府は彼と家族を強制失踪させ、独自のパンチェン・ラマの認定を監督した。本当のパンチェン・ラマはその日の失踪から約 24 年経過したこれまでも情報が得られていない。彼は世界で最も長く拘束されている良心の囚人の 1 人として 30 歳の誕生日を迎える」

以上

ダライ・ラマ法王日本代表部事務所
チベットハウス・ジャパン

http://www.tibethouse.jp/

チベットハウスは日本のNGOや寺院、そして個人の皆さまに支援していただきながら次のような活動をしています。

- 亡命チベット人社会の子どもの教育のための募金活動
- チベット人難民の社会復帰のための募金活動
- 自然災害時の緊急支援募金活動
- 平和、自由、正義のための各種イベント企画およびサポート
- 日本や他の東アジアの国々との文化交流
- チベット関連の教室を主催
  - ●チベット仏教
  - ●チベット語
  - ●チベット文化

ブルーブックによる寄付

便りを楽しみながら支援する。

チベット亡命政権は独自の財源を持たない難民組織です。そこで亡命チベット人は「グリーンブック」の制度を通して毎年自主的に寄付をし、亡命チベット人社会を支援しています。

「ブルーブック・プロジェクト」は、このグリーン・ブックにならい始まりました。送られてくるスタンプを貼付けた冊子は支援の記録になります。スタンプ発行単位は一口500円で、ご寄付をいただいた方にはブルーブックと呼ばれる手帳とともにご寄付の金額相当のチベットの切手が送付されます。その後寄付をされる度に切手が発行されますので貼ってください。皆さまからのご寄付は、ダラムサラの中央チベット政権財務省に直接送られます。振込用紙に氏名（フリガナ）、郵便番号、住所を明記のうえ、上記の口座にお振込みください。

銀行名：ゆうちょ銀行
口座番号：00160-8-566457
口座名：ダライ・ラマ法王日本代表部事務所

なお、振込用紙の通信欄に「ブルーブック」とご記入ください。（2回目以降のお振込みの方は、ブルーブック番号。）記入がない場合は一般の寄付扱いとなります。スタンプ発行は500円単位になっておりますので、端数が生じた場合、残りは一般の寄付とさせて頂きます。

http://www.tibethouse.jp/japan_office/bluebook.html

あなたにできること

ダライ・ラマ法王日本代表部事務所は皆さまの温かなご支援を必要としています。

- ●チベットの文化を楽しみ、豊かな芸術の奥深さに触れる。
- ●ダラムサラに行って滞在し亡命難民の社会状況を知る。
- ●チベットに行って滞在し、表に見えない社会状況を知る。
- ●中道やチベットの歴史、仏教についてよく調べ研究する。
- ●中国政府の報道や背後に偽証や抑圧がないか確認する。
- ●チベット人の高度な自治に関する支持を投稿、発表する。
- ●国会議員等に、チベット人の置かれた状況について話す。

チベットハウス会員

私たちの活動を支援してくださり、また随時行われるイベント等の情報を見逃したくないという方にはチベットハウスの会員になられることをお勧めします。入会のための条件などは一切ございません。退会も随時自由にできます。会員には以下のような特典がございます。

- ◆ダライ・ラマ法王の来日情報、講演のご案内
- ◆ダライ・ラマ法王来日講演優待席のご案内
- ◆チベットハウス・ジャパン主催イベントの会員割引
- ◆チベットハウス図書室の蔵書の閲覧および貸出し
- ◆会員向け季刊誌「チベット通信」の送付

ご入会方法

会費は入会金3,000円、年会費5,000円となっております。
下記の郵便振替口座にお振込みください。

銀行名：ゆうちょ銀行　口座番号：00100-1-89768　口座名：チベットハウス

なお、お振込の際には氏名、住所、電話番号およびメールアドレスを明記し、振込用紙の通信欄に「チベットハウス入会希望」とご記入ください。

子どもの教育への支援（里親）

ダライ・ラマ法王日本代表部事務所あるいは日本の支援グループを通して、里親としてチベット難民の子どもの教育をサポートすることができます。子ども一人の学費と生活費は年間四〇、〇〇〇円です。里子と連絡をとることもできますし、会うことも可能です。詳しくは事務所にお問い合わせください。

プロジェクトへの支援

NGOや個人が特定のプロジェクトへの支援をご希望になる場合は、教育、復興、医療などの分野で支援を必要としているプロジェクトがございますので、詳しくは事務所にお問い合わせください。

ボランティア

翻訳者、イベントスタッフ、事務を手伝ってくださる方などを随時募集しております。ボランティアとして登録してください。登録時に現在ボランティアとしてお手伝いしていただいている方の紹介が必要となります。詳しくは事務所にお問い合わせください。

一般の寄付振込先

銀行名：ゆうちょ銀行
口座番号：00100-1-89768
口座名：チベットハウス

なお、領収書が必要な方は電話、ファックスまたはEメールにて事務所までお知らせいただければ礼状を添えて送らせていただきます。

ダライ・ラマ法王日本代表部事務所
（チベットハウス・ジャパン）

〒160-0031 東京都新宿区西落合３丁目２６－１
TEL: 03-5988-3576 FAX: 03-3565-1360 E-mail : lohhdl@tibethouse.jp

祝祭日を除く月曜～金曜　午前9時30分～午後6時まで
（昼休憩午後1時から2時までは閉館）OPEN 9:30～13:00、14:00～18:00

LIAISON OFFICE OF H.H.THE DALAI LAMA
for Japan & East-Asia
http://www.tibethouse.jp/

チベットご支援者の皆様

拝啓

桜の候、ますますご清祥の段、お慶び申し上げます。平素よりダライ・ラマ法王、ならびにチベットの活動に格別のご理解とご支援を賜り、心よりお礼申し上げます。

チベット中央政権は、4月25日～5月17日にかけて、パンチェン・ラマ11世ゲンドゥン・チューキ・ニマが行方不明になってから25周年を記念し、世界各地でイベント活動を予定しておりました。しかしながら、この度、新型コロナウイルス感染拡大に伴い、自粛することになりました。

つきましては、この機に、ご支援者の皆様に近況報告として、チベット中央政権が作成した冊子の日本語訳を作成いたしました。ご査収の上、目を通して頂けたら幸いに存じます。いつも変わらぬ御支援を心から感謝しております。これからもどうぞ引き続きご協力をよろしくお願いします。

ダライ･ラマ法王日本代表部事務所スタッフ一同、チベット･日本の友好促進、文化交流など、充実した活動を続けてまいりますので、今後とも一層のご理解とご支援のほど宜しくお願い申し上げます。

末筆ながら、皆様のご健康とますますのご活躍を心よりお祈り申し上げます。

謹白

令和2年4月吉日

ダライ・ラマ法王日本代表部事務所
代表：ルントック

MISSING FOR 25 YEARS

行方不明になってから 25 年がたつパンチェン・ラマ 11 世に関する 25 の事実

A month-long global lobby on 25th year of Panchen Lama Gedhun Choekyi Nyima's enforced disappearance

UN, EU & Human Rights Desk, Dept. of Information & International Relations, Central Tibetan Administration